

『ジェンダー視点から戦後史を読む』

米田佐代子・大日方純夫・山科三郎編著 大月書店 2009年

おやさと研究所研教授
堀内 みどり Midori Horiuchi

「ジェンダー視点から戦後史を読む」ということについて、編者の米田は、第1に戦後認識において「ジェンダー視点」をもつということ、第2に「戦後史」をジェンダー視点からとらえるというふたつの意味を追求しようとするものであると述べる。その出発点は、最近の戦後史で女性の地位や社会活動、あるいは政治的課題への女性の参加などを取り上げるようになり、女性史や男性史も研究され、ジェンダー史学会も誕生する時代にはなったが、それでも戦後民主主義におけるジェンダー視点の欠落が生み出した課題を見ずえる視点は不十分ではないかという問題意識である(4頁)。

本書は、歴史の専門家だけでなく、法学・教育学・社会学・哲学などからの8本の論文集で構成され、大きく三つのテーマが設定されている。

第1は、「憲法」「教育」「労働(労働組合運動)」のテーマで、戦後の「民主改革」が日本国憲法のいう「個人の尊厳」と「両性の平等」に基づいたはずであるのに、それが歪曲され無視され置き去りにされてきた経緯と、それらの課題に内包されるジェンダーの問題とは何かを問うものである(5頁)。ここでは、新憲法成立過程における平等の解釈やその適用、さらに第24条や「法の下での平等」「本質的平等」に代表される議論には、たとえば「本質的平等」とは「差別ある平等」「本質的には男女は不平等」であるという解釈が紹介されている。つまり、男女というものは、本質は平等であるが、生理的、心理的相違は認めるという意味であり、差別を認めつつ平等に扱うという意味だと解釈され、個人の尊厳と両性の本質的平等によってたつ家族のあり方はイメージされていなかった(第1章参照)。こうした「ジェンダー差別が不可視化」されている状況は、教育の場面(第2章)や戦後の労働運動(第3章)にもある。

第2は、「性とセクシュアリティ」「地域社会」のテーマで、「産む性」としての女性(もちろん「産まない女性」「産むことを前提としない同性愛」等の問題を排除するものではない)の「個人の尊厳」を「性」の視点からどう構築するのかという課題から「地域社会」という「集団の場」でジェンダー関係がどのように変容してゆくかを追った「いのち」と「くらし」のジェンダー史論である(5頁)。たとえば、1994年にカイロで開催された国際人口開発会議で公式に定義された「リプロダクティブ・ヘルス/ライツ」は、その内容に「人間の生殖システム、その機能と活動過程のすべての側面において、単に疾病、傷害がないというばかりでなく、身体的、精神的、社会的に完全に良好な状態にあることをさす。したがって、リプロダクティブ・ヘルスは、人々が安全で満ち足りた性生活を営むことができ、生殖能力をもち、こどもを産むか産まないか、いつ産むか、何人産むかを定める自由をもつことを意味する」をもち、少なくとも検討課題を持ちつつも、自由権と社会権を融合した新たな性格をもった人権への道を切り拓いたとされる。しかしながら、日本においては、リプロダクティブ・ヘルス/ライツ概念に対する執拗な攻撃(いわゆる「ジェンダーに対するバックラッシュ」)があり、それは、性と生殖の領域での人権の確立が家族システムと再生産システムを根底から変える力になることに対する恐

れのあらわれであると指摘される(第5章参照)。

第3は、「戦争の記憶」「平和運動」のテーマであり、日本の戦後史として避けておれない課題を提起するものである(6頁)。ここでは、「戦争の記憶」が男女による差違があり、また、戦争や平和への関わり方にも違いがあることが指摘され、それは、たとえば平和を目指す方法にお

いて明確になる。また、戦後の経済成長は、男性の「軍人」は「企業戦士」に、「銃後の」女性が「主婦」と理解可能であるのは、天野正子や鹿野政直の先行研究からも読み取れるという。すなわち「企業戦士」の長時間労働を可能にしたのが、家庭生活を仕切る戦時中の「銃後の妻」並みの専業主婦の存在であった(天野)ことや「女性ことに主婦に、企業戦士の銃後を担う存在という自己意識をめばえさせた」(鹿野)という成果を紹介している(第6章参照)。

8本の論文はそれぞれに読み応えがある。もやもやしていたものが消えていくような気分にもなる。多くの論文が触れているように国連の「女子差別撤廃条約」は「女性の権利は人権である」につながり、「ジェンダーの視点」は見えなかった性の差別的実態を把握するのに役立ってきた。そうした状況を通じ、ジェンダー視点からジェンダー平等視点への方向性は、両性の「いのち」の営みの正常(健全)化であり、「いのち」の尊厳の平等化を現実のものとすると山科は指摘する(第8章参照)。

なお、各章の執筆者と題目は以下の通りである。

- 第1章 「憲法制定過程・民法改正過程とジェンダー」(植野妙実子)
- 第2章 「日本国憲法と教育基本法下のジェンダー: 平等教育—学校教育を中心に」(橋本紀子)
- 第3章 「戦後労働史とジェンダー: 賃金・雇用・労働運動をめぐって」(山田和代)
- 第4章 「性・生殖・セクシュアリティと人権の可能性」(浅野富美枝)
- 第5章 「地域社会の変容とジェンダー」(阿部恒久)
- 第6章 「戦争の体験・記憶・認識とジェンダー」
- 第7章 「平和とジェンダー: 「男性支配の暴力」から「女性参加の平和」へ」(米田佐代子)
- 第8章 「ジェンダー視点が切り拓く人間関係論と戦後民主主義: 近代批判から両性の平等・反戦平和を考える」(山科三郎)

